

## 奥田豊三博士を偲ぶ

坪川 家 恒\*

殆んど病氣とは縁のない人はまれにはいるものであるが、博士はそのまれな内に入る人であった。今は故人となった元国土地理院長の武藤博士は「奥田君はウォルサムの時計のようだ」と評して居られた。ウォルサムの懐中時計は国鉄の駅長が持っている、日本国有鉄道の運行の正確さを世界的に定評づけたものである。何事にもあわてず確実でねばり強い性格と、小柄ではあるが強靱な体質を持った博士を良く表わした言葉であるとその短評に感心したものである。

この4月、東北測量専門学校の始業式を終えられて、例によって夫人を伴われて緯度観測所へ自動車を運転してお立ち寄り頂いた時には、少し風邪気味だといわれたが、相変らずのお元気でであると思われた。千葉に帰られて間もなく入院されて、その病状がただならぬものであることをお聞きしたのは5月中旬であった。5月末、千葉大学病院にお訪ねした折にはさすがにかなりやつれて居られたが、話し方は相変らず御元気であった。亡くなられる一週間前にお伺いした時も「未だ僕に適応した肺炎の薬を見付られないようだ」と他人事のように話され、つぎつぎに話題がとび、退辞する時を見付けるのに骨が折れた。博士の生涯は、山野を馳けめぐった駿馬が一度病を得るや忽然と他界したような感がある。

筆者が昭和18年2月、技術将校として参謀本部陸地測量部に配属された時、博士は半年余り前に天文台から陸軍技師として同部に移られて居り、三角科の研究班に机を隣り合わせにして頂いた。以来40年余、殆んど同じ道を歩み、公私共に何かとお世話になろうとは、当時には想像できなかった。

研究班長は武藤博士で、磊落な気性の人で、そのころ書道に凝り、朝から夕方迄半紙を消費して居られた。同班にいた書道の大家比田井天来の子息がおだてたりけしかけた節がある。博士と筆者はひやかしたり、くさしたりする側に廻っていたが、その功績？が認められたか、比田井技師主宰する所の日本書道院の銅メダルを頂いた。分厚いズッシリした重さのあるもので、博士は時々「僕は日本書道院の受賞者だぞ」と人々を驚かせた。そういう茶目ッ気のある人であった。

兩人共に研究が任務ということになっていたが、何分測量そのものには初心者であるということで、研修を兼ねて各種測量に博士に同道することが多かった。黒磯で

の基線測量、伊豆での地磁気測量、朝鮮での基線網増大測量などがある。

東京空襲が激しくなり、昭和19年陸地測量部は三宅坂（跡地に現国会図書館）から京王線沿線の明大予科に移転、ついで20年春に各課ばらばらになって松本市附近に疎開した。博士と筆者は同じ部落のそれぞれ本家と分家の離れを借りて終戦の翌年迄暮らすことになった。

武藤、奥田、筆者と順次約10年の年齢差であるが、馬が合ったのか、少くとも筆者には公私共に楽しく過ぎて頂いた。日本が過酷な戦時下にあったことを想えば申訳ない様な気もした。

戦後、陸地測量部は内務省、次いで建設省へ移管され、地理調査所から現在の国土地理院に名称が変わった。新しい組織の長は奥田博士が引き継ぐまでの約16年間、武藤博士が担われることになった。新進気鋭の学士諸君が毎年採用されるようになり、これら後輩の直接間接の指導に当られた奥田博士の功績は大きい。天文台、陸地測量部時代の経験が大きな役割を果たしたようである。

21年12月、M8.1の南海道地震が発生し、翌年から復旧測量が行われた。戦後初めての大規模測量であった。これらの測量から得られたデータを整理し地震前後の水準網変化の反転を明確に指摘したのは奥田博士であった。巨大地震に伴う地殻変動の様相を明らかにした世界最初の論文である。これと子午儀による各地の天文経緯度観測から得られた経緯度変化に関する論文が博士の学位論文となった。三角、水準測量など陸地測量部からの測地事業に加えて、重力、地磁気測量などの新しい分野にも進展させ、国土地理院の行政事業官庁の機能に研究所的性格を加えるのに果たした博士の功績も又大きい。

測図部長時代は写真測量、地図調整の発展に努められたが、大縮尺国土基本図事業の発足に当り、企画、予算獲得に当られたねばり強い努力は敬服の至りであった。筆者などはほどほどにしたら如何ですかといった記憶がある。後年、緯度観測所長時代、「奥田所長は予算をとるのがうまいね」と感心する人がいたが、筆者は奥田先生にかかつては本省の予算担当者も「先生、予算を付けりゃ、いいんでしょ」と匙を投げるのだろうと答えたものだった。

いわゆる河野旋風で、国土地理院長を僅か1年半で退任されたが、間もなく緯度観測所長に就任されたのは緯度観測所にとっても、日本の測地学界にとっても誠に幸運であった。天文台、陸地測量部、国土地理院での研究

\* 緯度観測所

および事業の経験をふまえて、極運動は結局は全地球的活動を反映する現象であることを看破され、地球潮汐、重力などに研究分野を拡げられ、研究部の増設につめられた。緯度観測所の庁舎、施設も面目を一新した。

VLBI, SLR および重力絶対測定技術などの超高精度の計測技術を背景として、測地科学は変革的な進展を迎

えようとしているこの時期に博士を失わねばならないことは誠に痛恨の極みである。引退されたとはいえ博士の陰に陽にの助言は我々をどれほど力付けるかと期待されるからである。

博士と幽明境を異にした今は、生前の御業績に敬意と感謝を捧げると共に、安らかな御冥福を祈りたい。

## 若き日の奥田さんを追想して

清 水 彊\*

奥田さんは日頃スポーツで鍛えられていただけに、いつも御元気そのもので、私の知る限りこれまで病気されたことはなかった。従って、先日偶々新聞紙上に奥田さんの御訃報を発見した時は、正にびっくり仰天であった。後に奥田夫人から伺ったところでは、御当人は肺炎と信じられていて肺癌であることは御存知ないまま、約半年の闘病生活を続けられた後、胃の潰瘍による吐血多量で御他界とのことであった。奥田さんの御逝去は、測量界にとってはなお永い将来の御活躍を期待していただけに、大きな損失であることは何人も認めるところで誠に残念である。私個人としても、ほぼ半世紀に亘って親しく御付き合い戴いた畏友と、幽明を異にする悲しみと淋しさは拭いえない。茲に、奥田さんの思い出の一端、特に測地関係に携われる以前の若き天文学徒であられた頃の事柄を記して、追想させて戴くことにする。

奥田さんが虎尾・長沢さん達とともに大学を卒業されたのは、私より1年前の昭和8年であるから、奥田さんとの出会いも私の大学入学に始まる。当時、学部学生達が皆で三鷹の東京天文台まで出掛けて、天文台職員の方々との交歓を兼ねての野球試合を行ったことが幾度かあったが、殆んどの場合捕手を引受けておられた。この役割りは奥田さんが後に東京天文台にはいられてからの天文台内東西野球試合でも同じであった。

奥田さんは大学卒業後、東京天文台の橋元昌矣先生の私的助手となられ、同年9月から始まる長春における天文経緯度観測のための恒星選びを先ず課せられた由である。そして、橋元先生が昭和5・6年にかけての小惑星エロスの接近時に26吋屈折望遠鏡で撮影されていた星野写真乾板の測定や整約計算を、やはり橋元先生の私的助手となられた虎尾さんと共に、取組まれたらしい。

昭和10年1月から3月末に至る期間には、奥田さんは26吋屈折望遠鏡に付属の分光写真儀を取りつけ、前

年12月に発見されたヘルクス座新星を観測された。そしてそのスペクトル線の同定、その分光型や視線速度の変化、さらにスペクトル線の強度や巾、などにつき詳細に検討された。また、昭和11年6月に北海道で見られた皆既日食には、奥田さんは橋元先生に従って中頓別で太陽コロナの分光観測を実施されている。その観測装置は当時東京天文台内に放置されていた Troughton & Simms 製屈折8吋の赤道儀に、26吋屈折望遠鏡付属の分光写真儀を組合わせたものであった。この観測の整約には奥田さんが分光測光を分担され、コロナ連続光の強度分布を同じ高度で観測した駁者座の星のそれと比較して導き、コロナの各輝線の強度から得られた知見を報告されている。

この北海道皆既日食後、東京天文台では関口鯉吉台長の下に26吋屈折望遠鏡掛りが編成され、服部・奥田さん達のほかに、その時入台した私も加えられた。服部さんはZeiss製8吋望遠鏡による太陽面観測をも兼務されたが、後間もなくその方の専任となられた。従って、奥田さんと私は昭和16年までの約5年間を、関口台長の下で同じ研究業務に日夜協力して当ることになったのだった。まず、私達は竹田さんその他工場の人達の助力も得て、それまで円滑な作動が困難であった26吋望遠鏡赤道儀の解体修理に取り掛ったのであった。しかし、その極軸など不完全部分の改造や修理を経て、再組立と調整を行なった後、対物レンズの検査終了をもって、この作業を打切ったのは昭和14年であった。

それより先、昭和12年末から約1年間に恒り、私達は26吋望遠鏡に付属の分光写真儀をTroughton & Simms製8吋赤道儀に取付け、B型からK型に至る26個の輝線の分光写真観測を行った。そして、B-A型の16星につき水素のH $\beta$ とH $\alpha$ 吸収線の強度比を調べると、B型からA型に移る段階で特殊な変化が認められるのに気付いたのであった。なお、昭和13年には晴天の日没後約1時間における薄明の明るさを測定することも試みて

\* 仏教大